本合海水辺プラザ案内図

①八向楯

八向楯は最上川右岸の八向山山頂に築かれた中世の城（楯）です。最上川の方に突き出た尾根筋を二重・三重に断ち切って、本丸・二の丸・三の丸の郭を区画し、それぞれの境に薬研（やげん）掘りの二重の深い空濠（からぼり）を設けています。
本丸の南側は最上川に面した高い断崖で、この脚下を洗う激流によって、かなり浸食されています。

②矢向神社（矢向大明神）

本丸南面の白い断崖中腹に祀られている矢向神社は、平安時代前期、貞観１６年（８７４）の昔、政府から従五位を授けられた式内社「矢向神」とされ、古来、最上川を上下する舟人の信仰が厚く、同時代末、文治３年（１１８７）、兄頼朝と対立した源義経は、舟で最上川をさかのぼり、本合海で上陸して奥州平泉に向かいましたが、この時義経も「矢向大明神」を伏し拝んだと「義経記」に記されています。

③最上川

長さ２２９ｋｍ（全国七位）、水源は西吾妻山の標高２０３５ｍ地点、、水源地から河口まで約３～５日かけて流れています。流域面積７０４０平方メートルで山形県全体の７６％の土地を潤しています。富士川（山梨、静岡県）、球摩川（熊本県）とともに日本三大急流の一つです。

④金子兜太・皆子句碑

最上川河川敷に降りて、雄大な最上川と八向楯を背景にして建てられています。

郭公の　声降りやまぬ　地蔵鍋　〈兜太〉
ひぐらしの　網かぶりたる　矢向楯　〈皆子〉

⑤本合海大橋

内陸と庄内を結ぶ動脈として昭和９年（１９３４）に架けられ、現在の橋は昭和４６年（１９７１）１０月完成しました。

⑥芭蕉乗船の地（最上川ビューポイント選定地）

元禄２年（１６８９）３月２７日深川より船出、長途の旅に出た芭蕉と曾良の一行は、６月１日大石田から猿羽根峠を越え、新庄の渋谷風流宅に２泊し、６月３日ここ本合海から舟上の人となりました。
「奥の細道紀行」３００年を記念して、江戸時代から伝わる新庄の窯元・弥瓶窯で焼いた東山焼きの芭蕉と曾良の胸像が建っています。平成１２年１０月に、明治時代のころの渡船場が復元されました。舟運時代（明治１４年　秋）、ここより明治天皇は最上川を渡られました。
<芭蕉句碑>
五月雨を　あつめて早し　最上川

⑦八向公園・斎藤茂吉歌碑

最上川の雄大な流れと名勝八向楯、鳥海山、それに本合海の家並みが一望できる桜の名所です。最上川の流れとの対比が鮮やかです。
<斎藤茂吉歌碑>
最上川　いまだ濁りて　ながれたり
本合海に　舟帆をあげつ

⑧正岡子規歌碑（積雲寺境内）

積雲寺は山号を八向山といい、天正６年（１５７８）開山の古寺です。正岡子規は明治２６年（１８９３）に松尾芭蕉の足跡を訪ねる旅に出て、同年８月に本合海に到着し、その際に歌を詠んだとされています。
<正岡子規歌碑>
草枕　夢路かさねて最上川
ゆくへもしらず　秋立ちにけり

⑨澁谷　道句碑（二宮八幡宮境内）

澁谷 道氏は、奥の細道紀行で新庄に入った松尾芭蕉を自宅に２泊させ接待した澁谷盛信の子孫で俳人として活躍されております。
<澁谷 道句碑>
霧こむる　うねり雄々しき　本合海

⑩黛まどか句碑（二宮八幡宮隣P）

全国的に活躍している女性俳人 黛まどかさんが平成17年10月の「芭蕉乗船の地国際俳句大会」で詠んだ句です。同じ場所に「義経・弁慶上陸の地」碑があります。
〈黛まどか句碑〉
草の香に　一舟もやふ　最上川